

フットサルを発展させるために

～高知県にフットサルの普及を～

1210516 平岩 和也

高知工科大学 経済・マネジメント学群

はじめに

近年、フットサルは多くの人々に愛され、プレーされている。フットサルはサッカーに似たスポーツであり、小さなスペースがあれば少人数でできることから、レクリエーションスポーツとしても人気が高まっている。会社帰りのサラリーマンや OL が建物の屋上に設置されたフットサルコートでフットサルを楽しむ様子や、土日にプレーヤーのレベルに合わせた大会が開催され、経験者から未経験者まで多くの人々が賑わい、老若男女問わずフットサルを楽しむ様子がテレビやインターネットを通して度々見かけられるようになった。また、最近では大学の授業でもフットサルが取り入れられ、多くの学生がフットサルをプレーするようになった。2002年に開催された日韓共催ワールドカップによって増加したサッカーファンがフットサルにも興味を持ち始め、日本でフットサルがさらに認知される形で競技者も増加していった。そして2007年には、日本フットサル連盟が運営するフットサル全国リーグである「Fリーグ」が開幕した。

少年サッカーでは、2011年から全日本少年サッカー大会が11人制から8人制へ移行し、現在も引き続がれている。8人制移行の背景には、各プレーヤーのプレー回数およびプレー時間の増加や、シュート数、ペナルティエリア進入数を増加させることが挙げられる。ここには、日本サッカーの課題とされている両ゴール前での攻防の機会を増やすことも関係しているのだ。このように少年サッカーは11人制から8人制に移行されたが、今後少年サッカー人口の減少や各プレーヤーのプレー回数を増やすという観点から、少年サッカーにおいてフットサルが主流になる可能性もあると個人的に思っている。ちなみに、現在のサッカー日本代表で中心的な選手となっている原口元気選手や中島翔哉選手などは、少年時代にフットサル経験がある。

とはいうものの、『レジャー白書 2018』によると、2017年のフットサル競技者が約120万人であるに対し、サッカー競

技者は約380万人で大きな開きがある。ちなみに日本で人気のある野球競技者は約610万人もいる。サッカーや野球に比べてフットサルは、競技者をはじめ人気や認知度が劣っているという現状である。さらにフットサル競技者は2010年の約370万人をピークに年々減少傾向にあり、2017年にはピーク時の3分の1程度まで減少している。しかしながら、そんな中で、詳しくは後で述べるが、高知県は人口減少のテンポが他県に比して高いにも関わらず、2019年度のフットサル選手登録者数は中四国で最も多かったのである。

そこで本論では、まず、なぜ高知県にはフットサル競技人口が多いのか明らかにしながら、フットサル競技の現状や課題を把握する。そして、そのうえで高知県のスポーツ推進計画にも着目し、フットサルの有効性やフットサルを普及させる施策を打ち出し、高知県からフットサルを発展させる手立てを模索することを目的とする。

本論の構成は以下のようなものである。まず第1章ではフットサルの歴史について紹介し、フットサルの特徴やサッカーとの違いをまとめる。第2章では高知県のスポーツ推進計画の概要を説明し、高知県のフットサル競技の現状をまとめ、なぜ競技人口が多いのか提示したい。第3章では、第1章と第2章を踏まえて、他県での取り組みなども紹介しながら、スポーツ推進計画においてのフットサルの有効性やフットサルを普及させる施策を打ち出す。そして最後に、フットサル競技のこれからの展望を述べていく。

第1章 フットサルの概要

第1節 フットサルの歴史

フットサル「futsal」の語源は、室内サッカーを意味するスペイン語の「Futbol de salon」とポルトガル語の「Futebol de salao」の「Fut」と「sal」の合成語である。

フットサルは元々サッカーから派生したスポーツであり、室内サッカーとして楽しまれていた。フットサルの起源は大

大きく分けて2つの説がある。1つは、南米を中心に弾まないボールを使用して行われていた「サロンフットボール」。もう1つは、イギリスや欧州でサッカーボールや弾むボールを使用して壁などの跳ね返りを利用してアイスホッケーやスカッシュのように行われていた「インドアサッカー」である。当時、室内サッカーは世界各国で独自のスタイルで行われていた。そこで1961年に「国際サロンフットボール連盟(FIFUSA)」(以下FIFUSA)が設立され、1982年に「世界サロンフットボール選手権」がブラジルのサンパウロで開催された。FIFUSAは、後に「世界フットサル協会(AMF)」(以下AMF)に名称を変更され、世界選手権などを中心に室内サッカーを成長させ、国際交流を実現させた。このFIFUSAらの活動が評価され、サッカーの国際的な統括団体である「国際サッカー連盟(FIFA)」(以下FIFA)は、室内サッカーを傘下に取り込み、発展させようと思論んで、1986年に「Five-a-Side Football」という名称で5人制室内サッカー競技規則を制定し、この競技規則をもとに第1回世界選手権が開催された。大会終了後、FIFAはAMFを傘下に置き、室内サッカーを発展させた。後に行われた第2回世界選手権終了後、ルール改正に取り組み、1994年に5人制室内サッカーの競技名称を「フットサル」(Futsal)と統一した。

第2節 日本でのフットサル

日本でも、いつごろからは不明だが、各地で室内サッカーや豪雪地域での室内トレーニングとしてミニサッカーが行われてきた。そして1970年代前半に日本を訪れたブラジル人らによってサロンフットボールが広まり、1977年に日本サッカー協会(以下JFA)傘下として「日本ミニサッカー連盟」が設立された。1994年にはJFAが「ミニサッカー委員会」を設立した。この年に世界で室内サッカーが「フットサル」と統一されたため、日本でも「日本ミニサッカー委員会」が「日本フットサル委員会」に改名され、翌1995年に「日本ミニサッカー連盟」も「日本フットサル連盟」に改名された。世界で室内サッカーやミニサッカーがフットサルに統一されたことにより、日本全国でフットサルの普及活動が開始され、1996年に「第1回全日本フットサル選手権大会」が開催された。サッカー日本代表のフランスワールドカップ(1998年)への初出場や日韓共催ワールドカップ(2002年)での活躍により、日本中にサッカーブームが巻き起こり、サッカー愛好者の増加に伴っ

て、狭いスペースで気軽に楽しめるフットサルにも興味を持たれ始めたのである。

徐々に盛り上がりを見せる日本のフットサル界で、2007年9月「日本フットサルリーグ」(以下Fリーグ)が開幕した。第1回大会では、全国から8チームが参加した。その後、2018年からは2部制が導入され、現在ではディビジョン1に12チーム、ディビジョン2に6チームの計18チームで構成されている。参加チーム数は当初より増加したが、プロチームは名古屋オーシャンズのみで、その他のチームにはアマチュア選手も多く在籍する。そのためリーグ自体も、いわゆるセミプロリーグなのが実情である。そのようなFリーグであるが、2007年の開幕から3年ほどは観客動員数が右肩上がりであったが、2014年をピークに年々減少している。目新しさが先行する形であり、やはりサッカーや野球などのスポーツに比べるとまだまだ人気がなく、フットサルという競技が世の中に浸透していないことが感じられる。現在は、少しでもFリーグを身近に感じられるようにAbemaTVでFリーグDivision1全試合無料生中継を行っており、インターネット社会の中で手軽にFリーグを観戦できる環境作りに取り組んでいる。

第3節 サッカーとの違い

フットサルはサッカーから派生したスポーツであるためサッカーとよく似ているが、意外と細かなルールやサッカーとの違いがある。そこで、表1を参考にしながらフットサルの特徴やサッカーとの違いを説明していく。

表1 フットサルとサッカーの違い

	フットサル	サッカー
ピッチサイズ	20m×40m	68m×105m
ボール	4号球 (ローバウンド)	5号球
競技人数	5人	11人
交代	自由 (再プレー可)	3名まで (再プレー不可)
オフサイド	なし	あり
4秒ルール	あり	なし
試合時間	20分ハーフ (プレーイングタイム)	45分ハーフ (ランニングタイム)

出所：筆者作成

まず、コート の 広 さ と 人 数 の 関 係 か ら み て い く と、フ ッ ト サ ル の ピ ッ チ の 大 き さ は サ ッ カ ー の 約 9 分 の 1 な の に 対 し、人 数 は 約 2 分 の 1 で あ る。す な わ ち 小 さ な ス ペ ー ス に 選 手 が 密 集 し て い る の が フ ッ ト サ ル の 特 徴 で あ る。ス ペ ー ス が な い と い う こ と は 選 手 同 士 の 距 離 が 近 く、レ ク リ エ ー シ ョ ン な ど で フ ッ ト サ ル を 楽 し む 場 合 に は ボ ー ル に 触 れ る 機 会 が 多 い こ と や キ ッ ク 力 が な い プ レ ー ヤ ー で も 近 く の 仲 間 に 簡 単 に パ ス が で き る な ど の 利 点 が あ る。一 方 で、ス ペ ー ス が な い 中 で 工 夫 し て ス ペ ー ス を 作 り 出 す 動 き が 求 め ら れ る こ と や 相 手 と の 距 離 が 近 い た め 正 確 な ボ ー ル タ ッ チ 技 術 が 必 要 と な る な ど、よ り 専 門 的 な 楽 し さ が あ る。そ の 他 の 違 い と し て、フ ッ ト サ ル は 試 合 中 の 交 代 が 自 由 で あ り、何 度 で も コ ー ト と ベ ン チ を 行 き 来 で き る。サ ッ カ ー は 交 代 で き る 人 数 に 限 り が あ る た め 交 代 の タ イ ミ ン グ や、ど の 選 手 を 交 代 す る か が 重 要 に な っ て く る が、フ ッ ト サ ル で は 基 本 的 に 疲 れ る 前 に 早 め に 交 代 し て 体 力 の 消 耗 を 防 い だ り、チ ー ム で 時 間 を 決 め て プ レ ー 時 間 を 区 切 り、ロ ー テ ー シ ョ ン で 交 代 し て い く 方 法 が あ る。

そ し て 試 合 時 間 は 20 分 ハ ー フ で 行 わ れ、プ レ ー イ ン グ タ イ ム が 採 用 さ れ て い る。プ レ ー イ ン グ タ イ ム と は、プ レ ー が 行 わ れ て い る 時 は タ イ マ ー が 進 み、ボ ー ル が コ ー ト の 外 に 出 た 時 や フ ァ ウ ル が あ っ て プ レ ー が 止 ま っ た 時 は タ イ マ ー も 止 ま る ル ー ル で あ る。す な わ ち 試 合 が 進 行 し て い る 時 だ け タ イ マ ー が 動 く の で、試 合 展 開 に よ っ て は 25 分 で 前 半 が 終 わ る こ と も あ れ ば 40 分 程 か か っ て し ま う こ と も あ る。こ の よ う に 展 開 に よ っ て 時 間 が 左 右 さ れ る フ ッ ト サ ル に は 4 秒 ル ー ル が 存 在 す る。4 秒 ル ー ル と は ア ウ ト オ ブ プ レ ー 時 の キ ッ ク イ ン、ゴ ー ル ク リ ア ラ ン ス、コ ー ナ ー キ ッ ク、フ リ ー キ ッ ク は 4 秒 以 内 に 行 わ な い と 相 手 ボ ー ル に な る ル ー ル（日 本 フ ッ ト サ ル 連 盟 URL: <http://www.jff-futsal.or.jp/futsal/difference.html> より）で あ り、こ れ に よ り 試 合 を ス ピ ー デ ィ ー に 進 行 さ せ る こ と を 目 指 し て い る。

こ の よ う に、フ ッ ト サ ル は サ ッ カ ー 経 験 者 や サ ッ カ ー 少 年 が 判 断 や 技 術 を 向 上 さ せ る こ と を 目 的 に プ レ ー す る こ と が 可 能 で あ り、普 段 ス ポ ー ツ を し な い 社 会 人 や 高 齢 者 が レ ク リ エ ー シ ョ ン ス ポ ー ツ と し て プ レ ー す る こ と も 可 能 な よ う に、フ ッ ト サ ル は サ ッ カ ー と は 違 う 独 自 の ル ー ル で 老 若 男 女 誰 で も 楽 し め る ス ポ ー ツ と し て 確 立 し て い る。

第 2 章 高 知 県 の ス ポ ー ツ と フ ッ ト サ ル

第 1 節 高 知 県 の ス ポ ー ツ 事 情

高 知 県 で は、2002（平 成 14）年 2 月 に、生 涯 に わ た り 県 民 の 健 康 ・ ス ポ ー ツ を 計 画 的 ・ 総 合 的 に 推 進 す る た め、高 知 県 生 涯 ス ポ ー ツ 振 興 計 画 「と さ の ス ポ ー ツ プ ラ ン」を 策 定 し た。そ の 後、国 で は 2011 年 8 月 24 日 に 「ス ポ ー ツ 基 本 法」が 施 行 さ れ た。こ れ に 伴 い 高 知 県 で も 平 成 25 年 11 月 に 県 民 が 「ス ポ ー ツ を 通 じ て 健 や か で 心 豊 か に、支 え 合 い な が ら 生 き 生 き と 暮 ら す こ と の で き る 社 会」の 実 現 を 目 指 し、「高 知 県 ス ポ ー ツ 推 進 計 画」を 策 定 し た（高 知 県 ス ポ ー ツ 推 進 計 画 URL: https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310501/files/2013120600386/2013120600386_www_pref_kochi_lg_jp_uploaded_attachment_106552.pdf より）。高 知 県 で は、こ の 計 画 の 3 つ の 柱 と し て、① 子 ども の 体 力 の 向 上（子 ども の 運 動 ・ ス ポ ー ツ 機 会 の 充 実、子 ども の 発 達 段 階 に 応 じ た 望 ま し い 生 活 習 慣 の 定 着）、② 競 技 力 の 総 合 的 な 向 上（競 技 選 手 の 育 成 強 化、競 技 力 向 上 の た め の サ ポ ー ト 体 制 の 充 実）、③ 生 涯 ス ポ ー ツ の 推 進（地 域 に お け る ス ポ ー ツ 活 動 の 推 進、地 域 に お け る ス ポ ー ツ 環 境 の 充 実）と、そ れ ぞ れ 基 本 的 な 取 り 組 み 目 標 が 定 め ら れ て い る。現 在、「高 知 県 ス ポ ー ツ 推 進 計 画」は 他 の プ ロ ジ ェ ク ト と の 統 合 や 課 題 を 修 正 し、当 初 の 目 的 を よ り 確 実 に 実 現 さ せ る た め に 「第 2 期 高 知 県 ス ポ ー ツ 推 進 計 画 Ver. 3」に 進 化 し、3 つ の 柱 も 改 正 さ れ、① ス ポ ー ツ 参 加 の 拡 大（県 内 す べ て の 地 域 で み る ・ す る ・ さ さ え る ス ポ ー ツ の 参 加 人 口 が 拡 大 す る）、② 競 技 力 の 向 上（全 国 ト ッ プ レ ベ ル の 選 手 が 増 加 し、日 本 を 代 表 す る 選 手 等 を 多 数 輩 出 す る）、③ ス ポ ー ツ を 通 じ た 活 力 あ る 県 づ く り（ス ポ ー ツ を 通 じ て 一 体 感 や 活 力 あ る 地 域 社 会 を 実 現 す る）、と な っ て い る。

高 知 県 で は、子 ども の 体 力 は 全 体 的 に 上 昇 傾 向 に あ る、日 本 代 表 と し て 国 際 大 会 に 出 場 す る 選 手 の 増 加、成 人 の 週 1 回 以 上 の 運 動 ・ ス ポ ー ツ 実 施 率 が 増 加 し て い る と と も に、全 国 平 均 を 上 回 っ て い る な ど 一 定 の 成 果 を あ げ て き た。し か し、子 ども た ち の 運 動 習 慣 が 十 分 に 定 着 し て い な い、一 部 の 競 技 で は 国 内 外 の ト ッ プ レ ベ ル の 大 会 で の 活 躍 が み ら れ る ジ ュ ニ ア 選 手 が 育 っ て き た が、国 民 体 育 大 会 の 総 合 成 績 で は 毎 年 下 位 に と ど ま る な ど 全 国 的 に は 競 技 力 が 低 迷 し て い る な ど 多 くの 課 題 を 抱 え て い る。

こ こ で、老 若 男 女 誰 に で も 楽 し め る フ ッ ト サ ル こ そ 「高 知

県スポーツ推進計画」を進めるにあたり、高知県で最適なスポーツではないかと考える。第 2 節から高知県のフットサルの現状を把握しながら、なぜ高知県においてフットサルが最適なのか明確にしていく。

第 2 節 高知県のフットサルの現状と課題

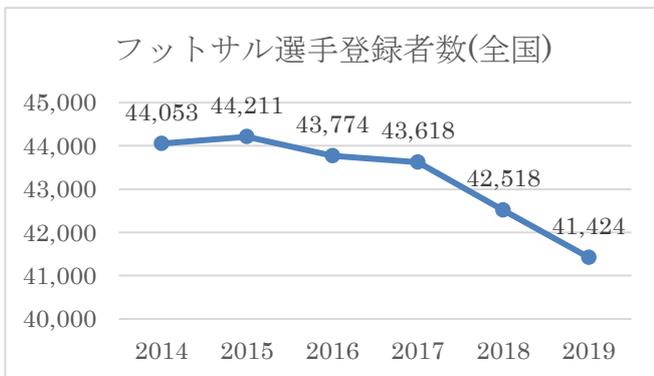
先に述べた通り、『レジャー白書 2018』によれば日本でのフットサルへの参加人口は年々減少傾向にある。2007 年に F リーグが開幕し、一気にフットサルへの注目度が高まり競技人口が増加した。2010 年に参加人口は 370 万人にまで達したが、2010 年をピークにそれ以降は右肩下がりであり、2015 年にはピーク時の半分以下の 150 万人にまで減少している。図 1 と図 2 のように、フットサルが危機的状況にあるのは一目瞭然である。

図 1 フットサルの参加人口



出所：公益財団法人日本生産性本部『レジャー白書 2018』, 2018, p. 66. より筆者作成

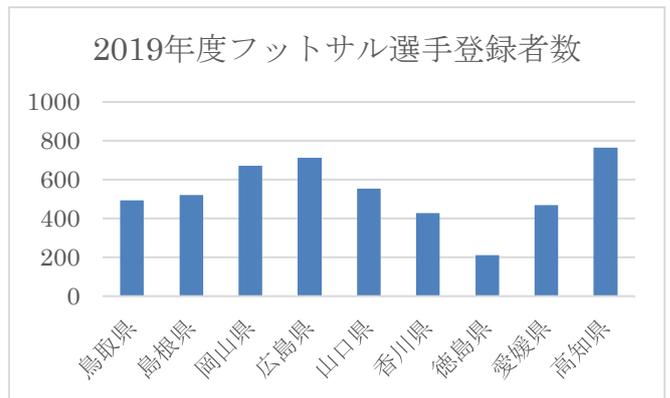
図 2 フットサル選手登録者数



出所：公益財団法人日本サッカー協会（JFA）
http://www.jfa.jp/about_jfa/organization/databox/futsa1.html より筆者作成

全国的にみてフットサルの競技人口は減少傾向にあるが、高知県では 2018 年度から 2019 年度のフットサル選手登録者数は増加している。2019 年度のフットサル選手登録者数は中四国で最多であり、図 3 に示されている通り、四国 4 県の中では飛び向けた競技人口を誇っている。高知県では「高知東海岸フットサル大会」、「Hi-Six フットサルカップ」、「JFA ファミリーフットサルフェスティバル」をはじめとした多くの大会が開催されている。また、「高知県フットサルリーグ」（以下高知県リーグ）では 1 部・2 部・3 部・女子・エンジョイ・シニアとカテゴリーが多く、様々な年齢層の方がリーグ戦を戦っている。こうした取り組みが競技人口の増加に繋がったとみられている。

図 3 2019 年度フットサル選手登録者数



出所：公益財団法人日本サッカー協会（JFA）
http://www.jfa.jp/about_jfa/organization/databox/futsa1.html より筆者作成

フットサル選手登録者数が多い高知県だが、実は、フットサルの競技レベルが高いというわけではない。競技人口が多い＝盛ん（強い）の構図はここでは成り立たない。実質、全国選抜フットサル大会では 2017 年に全国大会が高知で開催され、開催県として出場したのを除くと、2009 年に四国リーグ 2 位のチームが全国大会に出場するという当時のレギュレーションによりレオグロッソ高知が出場したのを最後に全国大会に出場できていない。また、「四国フットサルリーグ」をみると 2020 年のリーグ参加チームは香川 3・愛媛 3・徳島 1・高知 1 と高知県からは 1 チームしか参加していない。

高知県のフットサルの競技力が向上しない理由として、高知県リーグは先程も述べたように多くのカテゴリーがあり盛り上がっているものの、会場が人工芝のコートを主に使用し

ていることが大きい。人工芝は体育館と比べるとボールの転がるスピードや足裏でのボールの扱いやすさに違いが生まれる。フットサルの全国的な大会は全て体育館で行われているため、人工芝と体育館というコート環境の違いは競技レベルが上がらない要因の1つと言える。

また、高知県リーグではカテゴリーは多いものの競技志向のチームが少なく、仲間たちと楽しくフットサルをやっているという印象を受ける。高知県ではフットサルをしている社会人はサッカーもしている割合が高い。サッカーとフットサルの両立は難しく、試合の日程が被った場合にサッカーを選択する傾向が強い。フットサルを真剣に取り組む競技志向の選手やチームが少ないのが課題と言える。

今後は、高知県リーグ全試合体育館使用や競技志向チームとエンジョイチームでカテゴリーを分けてのリーグ編成などの取り組みに期待したい。また、高知県フットサル技術委員会では男子フットサルトレセン活動を行っており、選手の育成、競技力向上を目的とした男子のフットサル練習活動で基礎練習や、個人戦術など、フットサルに必要なスキルを、長期的な練習会でトレーニングをしている（高知県フットサル URL 連盟 URL: <https://kochi-futsal-federation.jimdofree.com/news-topics-archive/>より）。このような活動に社会人チームの選手や大学生にたくさん来てもらい、トレセン活動で得た知識や技術を自チームへ持ち帰ることで、技術の向上やチーム間での交流が生まれ、高知県フットサル界の活性化に繋がるだろう。

第3章 スポーツ推進計画とフットサル

第1節 高知でスポーツするならフットサル

高知県スポーツ推進計画は、スポーツ基本法第10条第1項に定める国のスポーツ基本計画を参酌して、その地方の実情に即したスポーツの推進に関する計画を定めるよう努めるものと規定された「地方スポーツ推進計画」であり、本県のスポーツの推進を図るための基本的な方向性を示すものである（高知県スポーツ推進計画 URL: https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310501/files/2013120600386/2013120600386_www_pref_kochi_lg_jp_uploaded_attachment_106552.pdf）。私は高知県の実情に即したスポーツとはフットサルだと強調したい。JFAが算出した「都道府県別チャート」によると高知

県の2019年度のフットサル登録者数は780人で全国順位は14位であるが、人口比順位では全国1位となっており、尚且つフットサルは高知県スポーツ推進計画の3つの柱（①スポーツ参加の拡大、②競技力の向上、③スポーツを通じた活力ある県づくり）の全ての要素を兼ね備えている。

①スポーツ参加の拡大では、現時点で高知県は人口比におけるフットサル選手登録者数が全国1位であることに表されているように、フットサルが県民にとって身近な存在である可能性が高いことがいえる。家族や友達がプレーしているスポーツなら親しみやすく環境についてもフットサルは室内で行うスポーツであるため天候に左右されることがなく、2002年に開催された高知国体をきっかけに建設された体育館が多数あって施設も充実している。世代別にフットサルを行う環境が整っており、ジュニア世代においては学校の体育館を利用して放課後の時間に、学生や社会人においては県が運営する体育館を利用して仕事終わりの夜や土日に活動し、シニア世代においては県が運営する体育館を利用して体育館の利用者が少ない昼の時間に活動できるため、フットサルスクールやレクリエーションスポーツとしてフットサルを行うことでスポーツ参加の拡大に繋がる。また、今後は高知県独自のフットサル大会やフェスティバルを開催することで更なるスポーツ参加の拡大が期待できる。フットサル高知県リーグにおいてもシニアリーグが新設されたため、今後ますますシニア層のフットサル参加者が増加することも期待できる。

加えて、障がい者スポーツにおいても、日本にはフットボールを通じて精神疾患・精神障がいのあるひとを中心に様々な人々の豊かな社会生活の実現を目指すソーシャルフットボールというものがあり、日本国内の様々な場所で大会が開催されている。2016年には大阪で第1回ソーシャルフットボール国際大会が開催され、競技人口は2,000人にも及んでいる。高知県でも高知県立障害者スポーツセンター体育館で高知県立大学フットサル部協力のもとフットサルスクールが開催されている。今後も県内の大学フットサル部やフットサルの社会人チーム協力のもと、このような活動を増加させることで身体に障がいがある方にもフットサルを楽しんでもらいたい。そしてこれらの活動はスポーツ参加の拡大に繋がるだろう。

②競技力の向上では、高知中学校が2019・20・21年と3年連続で全日本ユースフットサル大会に出場しており、2019年

の大会では全国 2 位に輝いている。高知県には競技ごとに県内の小学生から一般までの有望選手を強化選手に指定し、年間を通して定期的に質の高い強化練習を行う「全高知チーム」が存在する。現在、全高知チームはソフトボール・レスリング・剣道・カヌー・サッカー・ラグビー・水泳・陸上・卓球・柔道・バトミントン・ライフル射撃・バスケットボール・ソフトテニスの計 14 競技が参加している。参加している 14 の競技は全て国民体育大会正式競技なのだが、ここにフットサルも追加させることでフットサルの競技力が大きく向上することが期待できる。特にジュニア強化に力を入れることにより、小・中・高校生年代のフットサル全国大会での活躍やその選手たちが成長することで高知県全体のフットサルレベルが向上し、全国選抜フットサル大会でも好成績をあげることが期待できる。また、育成年代においては試合経験が必要となるため、高知県リーグで小・中・高校生年代の κατηγοリーを追加することで練習成果の発揮場所ができ競技力の向上に繋がる。

③スポーツを通じた活力ある県づくりでは、積極的に F リーグのチームなどを誘致してフットサル教室や大会などを開くことでフットサルの魅力を発信できる。また、フットサルのトップレベルの選手たちを間近で見ることでジュニア世代は憧れを抱き、一般の競技者は技術やテクニックを吸収する良い機会となる。実際、2017 年に F リーグの 2 試合が高知県で開催され、その年のリーグ優勝チームのシュライカー大阪や日本唯一のプロフットサルチームの名古屋オーシャンズなどが高知の地でプレーした。2 試合とも観客数は 1,000 人を超えて盛り上がりを見せた。高知県では野球やサッカーなどで高いレベルでプレーするプロチームが存在しないため、実際にプレーを見て憧れたり興味を持つということがなく、これが高知県のスポーツが活性化されない原因の 1 つであるといえる。よってフットサルでは積極的に F リーグのチームやフットサルの人気選手を誘致することで交流人口の拡大や地域経済を活性化させることを期待したい。

第 2 節 他県での取り組みとこれからの高知県

第 2 章で高知県のフットサル登録者数が多い理由として、高知県フットサルリーグはカテゴリーが多いということを挙げたが、他県はどうだろうか。香川県では 1 部・2 部 A・2 部 B・女子の 4 つのカテゴリーで構成されている。徳島県で

は男子・女子・U-9 の 3 つのカテゴリーで構成されている。女子リーグは不定期で開催されており、U-9 リーグは 2020 年度より新設されている。愛媛県では 1 部・2 部・女子・U-12 の 4 つのカテゴリーで構成されている。女子リーグは不定期で開催されており、U-12 リーグは 2019 年度より新設されている。このように大体 3 つか 4 つのカテゴリーで構成されている場合が多く、高知県の 6 カテゴリーというのは非常に多いというのが分かる。

ここまで高知県スポーツ推進計画でフットサルが有力なスポーツであることを述べてきたが、果たして高知県でフットサルを中心とした施策や取り組みは可能なのか。他県でのフットサル普及における取り組みを紹介しながら高知県でも取り組みが可能か考察していく。

福井県では、2006 年に「福井県フットサル選手権大会」という県独自のフットサル大会を開催した。この大会では U-9・U-10・U-11・U-12・U-15・U-18・U-19・MIX の 8 部門があり、若者世代を中心とした多くの人が参加できる大会となっている。決勝戦の様子を地元・福井テレビで中継したり、北信越リーグに所属する地元の JOGARBORA や丸岡 RUCK レディースによるエキシビションマッチを企画するなど多くの人たちにフットサルに興味を持ってもらえるように工夫しながら毎年開催している。2013 年の大会では 133 チームが大会に参加して盛り上がりを見せた。福井県にはサンドーム福井という施設があり、フットサル委員会ではサンドーム福井をフットサルの聖地にするという夢を抱えながら日々フットサルの普及に向けた取り組みを行っている。

兵庫県では、1995 年の阪神淡路大震災をきっかけに、これまで使用していたサッカーコートが使用できなくなったため狭い場所でも行えるフットサルが推進された。現在では F リーグに所属するデウソン神戸、地域チャンピオンズリーグ優勝経験の SWH フットサルクラブ、全日本女子フットサル選手権大会と女子の地域チャンピオンズリーグ優勝経験のアルコイリス神戸など様々なカテゴリーで好成績が収められており、県独自の女子フットサル大会ではママさん・一般・少女の 3 カテゴリーに分けて開催されて盛り上がりを見せている。今後も普及・強化の両面に力を入れてフットサル大国兵庫を目指している。

このように他県の活動を見てみると県独自のフットサル大

会を開催することがフットサル普及に向けた取り組みの柱となることが分かる。県独自のフットサル大会を開催することで県全体としてフットサル熱を高めることができる。大会では、カテゴリーを増やすことでフットサル選手登録者数や大会参加者の増加が見込め、大会資金や優勝賞品などを地域企業に協賛やスポンサーしてもらったことで経済効果も見込める。このように、フットサル大会を開催することでフットサルの普及や経済の活性化に繋がるので積極的に大会を開催してほしい。県独自のフットサル大会は様々な県で開催されていたが、県をあげてフットサルを支援していく活動をしている都道府県は見当たらなかった。また、子どもや高齢者を対象としたその他のフットサル普及活動もあまり行われていなかった。よって他県に先駆けて高知県が一体となってフットサルを普及させていくことが可能であり、成功すればフットサル大国になるチャンスである。

現に、高知県フットサル連盟副理事長兼フットサル委員長の下村勉さんに話を伺った結果、高知県スポーツ推進計画にフットサルを取り入れることに賛同を頂いた。高知県フットサル連盟としてもフットサルの普及や強化を行う上でスポーツ推進計画における3つの柱が上手くフットサルでも活用できると考えている。高知県リーグにおいてU8～U15の育成年代のカテゴリー追加による競技力向上やFリーガーを呼んでのフットサルクリニックでスポーツ参加の拡大や活力ある県づくりを目指す。連盟としては、今後競技力向上に力をいれていきたいので、全高知チームやジュニア強化に力を入れているスポーツ推進計画にフットサルを追加することでフットサルの普及に繋がるだろう。

スポーツの盛り上がりか欠ける高知県でフットサルという競技人口が多いスポーツを発展させることで県全体が盛り上がり地域の活性化に繋がるだろう。そして何よりアマチュアスポーツといえども、これだけ県内で盛んな競技を支援しない、発展させる仕組みを考えないのは勿体ないと考えられる。そのうえで、私はフットサルを高知県スポーツ推進計画に取り入れることを提案する。

おわりに

本論では、フットサルの概要をまとめた上で高知県のフットサル人口が多い理由や現状を明確にし、高知県からフット

サルを普及させられるような施策を打ち出した。近年フットサル人口が減少する中で、人口比率によるフットサル選手登録者数が全国1位である高知県では高知県スポーツ推進計画にフットサルを取り込むことが有効だと確認できた。フットサルは高知県スポーツ推進計画の3つの柱の条件を満たしており今後高知県スポーツ界を盛り上げ、フットサル大国として全国に名を馳せる可能性があるスポーツである。よって高知県としてはより一層フットサルに力を入れることが不可欠であり、まずは高知県フットサルリーグのカテゴリーの追加、子どもやお年寄り向けのフットサルスクールを行うことによりフットサル参加者を増加させることが普及への第一歩である。

人口が多くスポーツが盛んな地域ではなく、人口減少が深刻化してきて、尚且つスポーツが盛んではない高知県でフットサルが普及し、フットサル大国高知になる未来に期待して終わりにしたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり、インタビューにご協力頂きました高知県フットサル連盟副理事長下村勉様に心より感謝厚く御礼申し上げます。また、ご指導を頂きました生島淳先生、馬淵泰先生へ心より感謝申し上げます。

参考文献

- ・古本 智大、入口 豊、井上 功一、中野 尊志、大西 史晃 (2010)『フットサル普及の現状と展望(I)』大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学
- ・古本 智大、入口 豊、井上 功一、中野 尊志、大西 史晃 (2010)『フットサル普及の現状と展望(II)』大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学
- ・古本 智大、入口 豊、井上 功一、中野 尊志、大西 史晃 (2011)『フットサル普及の現状と展望(III)』大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学
- ・須田 芳正、大嶽 真人、依田 珠江、石手 靖、田中 博史 (2004)『日本におけるフットサルの普及に関する研究』慶應義塾大学体育研究所
- ・田中 直樹 (2009)『競技フットサルの現状と展望～フットサルの誕生からFリーグまで～』早稲田大学スポーツ科学部

卒業論文

・高知県文化生活スポーツ部スポーツ課（2020）『第2期高知県スポーツ推進計画Ver.3～スポーツが変わる！未来へつながり～』